

# 生成AIの現在地

中島 隆夫

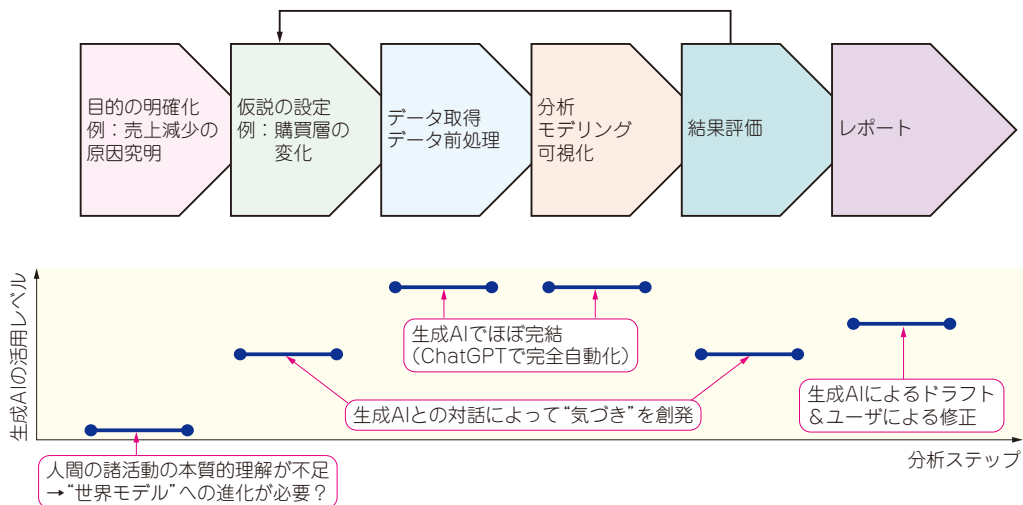


図1 データ分析の各段階における生成AIの活用レベル  
2024年6月現在の話であり、2025年には変わっている可能性がある

生成AIはまさに日進月歩、コロナ禍だった2021年ころからChatGPTをはじめとして次々とサービスがリリースされ続けています。1年もたつとがらりと風景が変わる戦国時代の様相を呈している中で、タイムリに情報をキャッチアップしていくことは容易ではありません。

## 使いどころ

### ● 手順化できる作業は任せられる

データ・サイエンティストの端くれである筆者の視点から生成AIの使いどころを示したのが図1です。タスク全体の作業量の8割を占めるといわれる前処理や、分析そのもの(グラフによる可視化を含む)では、例えばChatGPTの有料版であるChatGPT plusによってほぼ自動化が可能です<sup>(1)(2)</sup>。普段Python(Jupyter)で分析をしているデータ・サイエンティストが、全自動ではなくちょっとお手製の分析をしたければ、GitHub Copilotを使うと自然言語のプロンプト

で効率良くPythonコードを生成できます。一見複雑ですが単純作業の集合体として構成されているタスクは、生成AIを使えばほぼ自動化される世の中になりました。数理的にどんな高度な分析であろうが、手順化できる作業である限りはほぼ対応できるというのが現状です。

### ● 創造的な仕事は難しい…けれども

一方で仮説を作ったり得られた結果の意味を評価したりすることは、全自動というわけにはいきません。それでも分析者の会話相手になることによって(いわゆる壁打ち)分析者の創造性を引き出すことができます。しかしそもそもの目的設定の部分になると、単なる話し相手の域を出ないのが正直なところで、(プロンプト・エンジニアリングの腕次第かもしれないが…)。

現在、サービス化されている生成AIはメタ思考になればなるほど世界の諸相についての理解不足が目立ってくる印象ですが、生成AIの次にくる世界モデ